本願寺御影堂　墓股（かえるまた）の飛天・迦陵頻伽　写真提供:京都府教育委員会文化財保護課

親鸞聖人750回大遠忌

ISSN 1880—182X

第三号

2006（平成18）年6月30日発行

Buddhist Music — Newsletter

佛教音楽

ニューズレター

特集：幼児・青少年の仏教讃歌

浄土真宗本願寺派　教学伝道研究センター
本願寺仏教音楽・儀礼研究所
http://www2.hongwanji.or.jp/ongaku/

2006（平成18）年 宗祖降誕会 園児のつど
写真提供=本願寺出版社

仏教音楽展望

特集：幼児・青少年の仏教讃歌

幼い日・青春の日にうたった歌はいつまでも心に残ります。
だからこそ、子ども達に喜んで歌ってもらえる
仏教讃歌が必要なのではないでしょうか。

若い世代に必要な仏教音楽

小谷保育園長　丁野（ようの）　恵鏡

期待される新しい音楽法要

20年ほど昔のことである。初めてのインド仏跡巡拝で、ブダガヤのバンガローに宿泊した。夜７時を過ぎてベッドに横たわると、どこかから微かに合唱の声が聞こえてきたのである。夜気をふるわせ、高く低く流れてくる音声のすばらしさに魅せられ、私は吸い寄せられるように、いつしか小走りで大精塔に向かっていた。その頃は塔の周辺に柵もなく、どこからでも中に入れたのである。煌々と照る月明かりの中に、２列に並ぶ20人ほどの集団があった。服装からチベットの巡礼者とわかった。森を振るわせて響く声明の響きに、その頃創刊された仏教音楽研究所（現：本願寺仏教音楽・儀礼研究所、以下「仏音研」）の機関誌『佛教音楽』を思い出した。ご門主の巻頭のお言葉に「仏教音楽は信仰への誘いであり、信仰そのものの表現である」との一節が

あった。今、チベット巡礼者の音楽は優美ではあるが西洋の音楽ではなく、和讃に「宮商和して‥‥」とある、つまり不協和音が見事に調和した響きが東洋風であり、これこそ信仰そのものの表現、信仰へと誘う浄土の音声ではあるまいか、と鳥肌が立ったのである。こみ上げてくる熱いものを押さえながら、私は側の石垣に腰を降ろし、その法要が終わるまで、聞き入っていたものである。

1975年前後の仏音研には、主として小・中学生など、青少年が用いる日常の音楽法要を創作しようとする動きがあった。いわゆる《三帰依》《さんだんのうた》D. ハントの《念仏》による法要形式を見直そうとする取り組みである。それらの曲はそれぞれに優れているとしても、セレモニー全体に一貫性がなく、盛り上がりに欠けることから、さらによいものがほしい、という声が高かったのである。専門

目次

＊仏教音楽展望　― 若い世代に必要な仏教音楽：丁野恵鏡 …… p.2
戦前に花開いた仏教童謡の世界をもういちど：福本康之 … p.4
＊クローズアップ ― 龍谷総合学園における音楽法要の取り組み：小川秀樹 …… p.5
＊交流のひろば　― 安芸仏教音楽連盟のおこり　：廣濟兼壽 …… p.6
光国寺クワイヤー　：稲田静真
混声合唱団コーロ・サンガ　：大分哲照 …… p.7
北豊教区仏教讃歌を歌う集い：谷　憲雄

委員会では度々集まって、経段の部分をどうするかなど熱心に検討を繰り返していたが、そのうち幼児の音楽法要の話が浮上してきた。そして急遽この企画に取り組むこととなり、1978年、今は亡き中田喜直氏の作曲によって『幼児のおつとめ』が完成したのであった。この曲ができあがった経緯については、すでに『まことの保育体系―第二巻』に記したが、今日全国の本願寺系幼稚園・保育園で広く用いられるようになった。

しかし、当初の計画であった青少年向きの音楽法要については、その後残念ながら立ち消えになってしまった。《三帰依》はともかく、D.ハントの《念仏》などは明治以降ハワイ教団から逆輸入された曲であり、《さんだんのうた》が作曲されたのも1955年頃である。その後高度の音楽技術を必要とする法要スタイルのものは二、三発表されたが、日曜学校などで身近に用いる音楽法要は、未だ発表されていない。子どもたちの誰もが親しみやすく、一般寺院でも容易に用いることができる青少年のための音楽法要が、今、切望されているのである。

幼児のための新しい仏教讃歌の創作を

ここ30年ほどの間には、何曲かの新しい仏教讃歌が発表された。詩を公募したり、著名な作曲家に依頼した曲など、いろんな行事や集まりで歌われているものも少なくない。それらは仏教音楽研究所の活動の一つとして高く評価されてよいが、不思議に幼児や少年向きの新しい仏教讃歌は皆無に等しい。現在よく歌われている幼児の讃歌は、昭和の初め頃に発表されたものが多い。当時優れた詩人の作品に、我が国を代表する何人かの作曲家が曲をつけたものがあり、それらは今も保育の現場で歌い継がれている。

しかし、そうした曲は名曲であるが、歌詞が現代っ子にはなじまない表現であったり、スローテンポであるため好まれず、このためよく歌詞を間違ったり、また今の若い保育者にも敬遠されがちである。名曲は名曲として歌い継ぎたいが、身近な現代感覚の幼児向き仏教讃歌が求められているのである。讃歌ばかりでなく、仏伝や宗祖の伝記、ジャータカなどをテーマにしたミュージカルやオペレッタも作って欲しいとの声が高い。

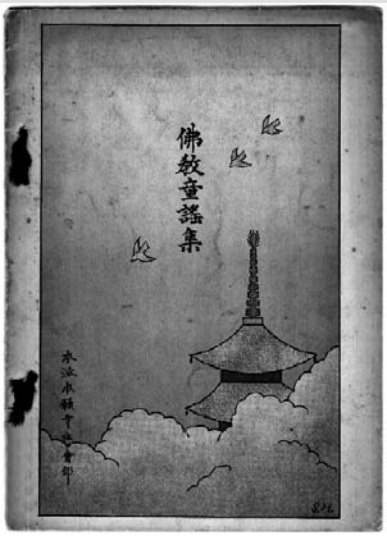
次世代に宗教的感性豊かな仏の子を育み、お念仏のみ教えが広まるために、今こそ新たな仏教讃歌創作への、更なる取り組みが期待されているのである。

＊資料庫から　― 資料が語るあの時あの場所：オーケストラが奏でた仏教の調べ …… p.8
仏教洋楽人物プロファイル：弘田龍太郎 ― 子どものために
歌ってみませんか：金の扉（詞・武内俊子　曲・小松清） …… p.9
＊情報コーナー ― みる・きく・よむ：BOOK・CD・イヴェント情報　ほか …… p.10
＊研究所だより ― 演奏団体登録のお願い・研究スタッフ・御堂演奏会だより …… p.11
＊本願寺文化にふれる ― 本願寺 折々の文化：籠谷眞智子 …… p.12

戦前に花開いた仏教童謡の世界をもういちど

常任研究員　福本　康之

明治以降、約100年以上にわたり、様々な作品が発表されてきた仏教洋楽の世界。その歴史を概観すれば、そこには二つの大きな流れを見てとることができます。ひとつは、今日の合唱運動につながるもので、明治期以降、仏教婦人会を中心に展開されてきました。そしてもうひとつ、それは幼児や青少年などの若い世代が歌い継いできた仏教童謡の世界です。



昭和五年:本願寺社会部発行『佛教童謡集』

■望まれた子ども向けの仏教洋楽作品

西洋音楽が本格的に導入されはじめた明治初期、仏教界でも各地の少年講などにおいて、小学唱歌として発表された《春のやよひ》が歌われていました。その背景には、近代化の必要を感じていた仏教界でも洋楽を導入すべきと考えられましたが、独自の作品がなく、仏教的な内容の歌詞であった同作を用いたという事情があったようです。

■仏教童謡の興隆

時代が下り、大正期の仏教界では、日曜学校運動が興ります。また同時代には、子ども向けの良質な童謡と童話を世に送り出すことを目的とした「赤い鳥運動」が盛り上がりを見せました。そうした時代の流れのなかで、ようやく子ども向けの仏教洋楽作品が数多く発表され、日曜学校での礼拝や各種の行事で歌われるようになりました。その中心的な役割を果たしたのが本願寺教団であり、平安高校で教鞭を執っていた野村成仁（のむら せいじん）がその牽引役を務めたのです。

■江崎（えざき）　小秋（しょうしゅう）と仏教童謡協会

また同時期の東京に目を移せば、仏教詩人の江崎小秋による『仏教童話と童謡』や『新仏教音楽』といった雑誌の刊行が、大きな事績として確認されます。江崎は、弘田龍太郎や野口雨情ら当時を代表する音楽家や詩人と連携し、良質の作品を数多く世に送り出しています。宗派を超えた活動として展開を見せたことも、忘れてはならないでしょう。本願寺派としても、九條武子夫人が詩を提供するなど、積極的な関わりを持っていました。

■これからの仏教童謡を求めて

こうした活動の結果、多くの仏教童謡作品が世に送り出されました。しかし、残念なことに今日その多くは、あまり聴くことができません。それらの埋もれた作品に、もう一度光を当てることも当研究所の大事な役割だと考えています。ですが、何よりも大切なことは、今の子どもたちが歌いたいと思う、つまり現代の子どもたちの感性にあった作品が必要だ、と私たちは考えています。

宗祖降誕奉讃法要（音楽法要）
2006（平成18）年5月21日
写真提供＝本願寺出版社

クローズアップ

宗門関係学校での宗教教育において、「音楽法要」の果たす役割は益々に増大していると考えられます。

「現代に相応した法要･儀礼の創設とは何か」を問う時何が求められ、何が有効かを探らなければなりません。

龍谷総合学園における音楽法要の取り組み

広島音楽高等学校 教頭　小川　秀樹

「♪我建超世願～必至無上道」総御堂に響き渡る宗門校生徒と本願寺合唱団の皆様による重誓偈の合唱を感無量の想いで聴き入りました。昨年夏の宗教教育研究会（第３分科会・音楽部会）において、全国の宗門校生徒による合同合唱団の結成が決議され、宗祖降誕奉讃法要での「音楽法要　重誓偈作法」実現へ向けて、様々な課題が検討されて来ました。

宗門校ではそれぞれ独自に音楽礼拝を行っていますが、この宗教教育研究会の場で情報交換を行い龍谷総合学園として今後各校においてどのように音楽法要に取り組むか協議されています。今回の合同合唱団による音楽法要もその一つの試みでしたが今回の成功を受けてさらに前向きに発展すると確信しております。

本校では毎週月曜朝礼と式典（入学式・卒業式・創立記念日・降誕会・御正忌）法要を音楽礼拝で行っています。音楽専門高校ですから歌えて当たり前ですがそれ以上に生徒は素直に気持ち良く合唱してくれています。主に歌われる聖歌は「真宗宗歌、献灯・献華・献香、敬礼文・三帰依、さんだんのうた、念仏、恩徳讃」等です。来賓の方々から感動の声を聞き毎回ホッとしていますが、今後はさらにそれぞれの行事に応じて作曲された聖歌に取り組みレパートリーを拡げたいと思っています。

献花

感動とともに厳粛に歌う高校生

合掌･念仏が自然に

今年の宗祖降誕奉讃法要（音楽法要）は、2006（平成18）年5月21日、全国から集まった龍谷総合学園の高校生40名と中央仏教学院の院生2名、そしてプロの歌手及び本願寺合唱団のみなさんによる素晴らしい演奏で勤められました。

■龍谷総合学園参加校
旭川竜谷高等学校・札幌龍谷学園高等学校
千代田女学園高等学校・国府台女子学院高等部
龍谷富山高等学校・尾山台高等学校・北陸高等学校
岐阜聖徳学園大学附属高等学校・平安高等学校
崇徳高等学校・広島音楽高等学校・敬愛高等学校
筑紫女学園高等学校・東九州龍谷高等学校

■指揮：田末勝志さん　■伴奏：森琢磨さん

交流のひろば

みなさんの活動をご紹介するページです。
投稿をお待ちしております。

今号は教区単位の「仏教音楽連盟」がある安芸教区と、
九州地区で活躍されている合唱団をご紹介します。

安芸仏教音楽連盟のおこり

安芸仏教音楽連盟前会長　廣濟　兼壽

安芸仏教音楽連盟の結成のきっかけは、明顕寺（安芸教区安芸北組）住職様より「あなたのところのコーラスとうちのコーラスで仏教讃歌を歌ってみたいですね」とお話をしたことでした。そして、平成5年5月に地域の町民センターで明顕寺と広済寺のささやかな演奏会を開くこととなりました。「上手に歌って聞かせるための演奏会ではなく、仏教讃歌の旋律やハーモニーの美しさを感じながら、歌詞にこめられた信心の味わいを共に歌いあい語りあいましょう」と話し合い会場で集いました。

演奏会終了後、歌い終えた喜びと演奏会を終えたことで実にさわやかな気分でした。一ヶ寺のコーラスの声量では出せない重量感のある豊かなダイナミックスが心地よく充実感がありました。

讃歌の心を共に味わい声を一つにして歌いあうという

機会が私たちの身近なところになかったためとても意義深いことと感じました。そこでこの感動を広く皆さんとご一緒に味わいたいと話し合い組内や教区内に呼びかけ連盟を結成しました。見真講堂や郵便貯金ホールで定期演奏会を開催し、今や加盟団体は35団体になっています。演奏会の形態は各団体の個別演奏ではそれぞれの元気な歌声をお互い聴き合い、合同演奏では声を一つにし高らかに歌いあうという二部構成で、約600人のステージ上での大合唱を毎年の恒例として続けています。

光国寺クワイヤー

大分教区大海組　光国寺住職　稲田　静真

光国寺クワイヤーは平成四年に誕生した。混声合唱団だが、男声が少ないのが悩みの種。現在、団員は門徒、他門徒を問わず約四十名。そのうち半数は保育園の保育士で、自身の音楽研修も兼ねて参加している。なにしろ素人ばかりのあつまり、しかも練習は月一回であるから、覚えては忘れ、忘れては覚えの繰り返し。そんな私たちのレベルに屈することなく、並はずれた根気と抜群のユーモアセンスで指導してくださるのが辛島光義先生（別府大学講師）である。練習時間は笑い声が絶えない。先生の高い音楽性に圧倒されつつも何とかきれいなハーモニーをと、お互い励まし合って、はや十五年目を迎えた。

発表の場としては、大分市コンパルホールにおいて五周年、七周年と、記念コンサートを二度開催した。また、平成十年の住職継職法要では「音楽法要」を担当し、平成十二年には、本願寺ハワイ教団の、〈ガータ・フェスト（ハワイ島主催）〉に参加し交流を深めた。地道にコツコツが持ち前ではあるが、来年は久しぶりに発表の場を持ちたいと、現在その案を練っている。

混声合唱団コーロ・サンガ

福岡教区西嘉穂組　明圓寺住職　大分　哲照

1975（昭和50）年8月、仏教讃歌をより多くの方々に伝えたいという思いから、西嘉穂組の住職・坊守・門信徒を中心に発足しました。もともと組の仏教青年会活動として「サンガの会」があり、その中にコーロ・サンガもあったのですが、当時は休止状態でした。当初10名で発足しましたが、昨年11月の30周年記念第11回演奏会では、41名のメンバーがステージに乗りました。結婚や仕事で退団していったOB・OGも、このステージに立つことができ感慨無量でした。単独の演奏会だけではなく、毎年行われる地域の合唱祭や、市の文化祭においても仏教讃歌を歌うことをずっと続けてきました。

週一回の練習と月に一度の臨時練習を通して、仏教讃歌を中心にさまざまなジャンルの合唱曲を歌っています。私は創立以来の指揮者ですが、初めて入ってきた団員の

方が、仏教讃歌を歌ってみて、「仏教にはこんなすばらしい讃歌があったのですか」という言葉を何度となく聞きました。ふりかえってみますと、それが今日まで続いた原動力であったと思っています。

合唱という形で声を合わせるためには、まず聴かなければなりません。聴き合いながら一つの曲にまとめていく作業は、どこか、お聴聞と重なるところがあるように、この頃感じています。

組内の仏前結婚式や追悼法要などにも参列していますが、特に仏前結婚式は本人や親戚の方々はもとより、教会や神前結婚式しか知らない方々にはとても新鮮なようで、讃歌を歌う私たちにとっても大変ありがたい経験となっています。今後も機会あるごとに、仏教讃歌を歌い伝えたいと思っております。

北豊教区仏教讃歌を歌う集い

北豊教区門司組　仏願寺住職／門司みのり合唱団　代表　谷　憲雄

北豊教区仏教讃歌を歌う集いは15年前に鎮西別院での教区若婦人の集いで、地元の合唱団が毎年仏教讃歌の歌唱指導を行っていたのが発端で、その後参加者のお寺さんから、私のお寺でも歌いたいと、次々と合唱の仲間が増えて、じゃあ年一度の発表会をやりましょうと云うことになり、恒例の仏教讃歌フェスティバルが生まれました。現在6団体で構成され会場を持ち回りで仏讃を中心に色々なジャンルの曲をとりいれてお互いに楽しく聞きあってレベルの向上と、お念仏の友垣の輪を深めております。

思いますに今日お寺の合唱グループがこのように全国に広まっておりますのは毎年開催されている本山での御

堂コンサートが大きな要因です。新しい仏教音楽の作成と既存の曲の巧妙なアレンジでレパートリーが増え、参加者には楽譜と二部の練習CDがあり、当日の懇切なリハーサルは地方で歌うものには大変勉強になります。何よりも六百人の大合唱は感動的で心が揺さぶられます。この体験を生かしながら今後とも手をとりあって仏教讃歌の興隆に努めてまいりたいと思っています。

資料庫から

連載：資料が語るあの時あの場所　第２回

オーケストラが奏でた仏教の調べ
―― 学生たちの歌声とともに

常任研究員　福本　康之

時に昭和16年4月23日午後7時、京都宝塚劇場を会場に、日本の楽壇において大いに注目を集めることとなった演奏会が開催されました。

「佛教音樂による新交響楽團大演奏會」と銘打たれたその演奏会は、山田耕筰の交響仏教詩曲《梵音響流》や仏教聖歌（《如来讃》などの6曲）、細川碧の歌劇《仏陀》の一部など、まさに仏教洋楽一色のプログラムで、これらの作品を、当時の日本を代表する音楽家山田耕筰の指揮のもと、新交響楽団（現・NHK交響楽団）と伊藤武雄ほか数名の独唱者たちが協演するという豪華なものでした。

そのなかでも注目すべきは、同演奏会が、本願寺派挙げてのイヴェントであったという事実です。この演奏会は、「本願寺當局の深き理解と熱誠とに援けられて誕生した」（プログラムより）とされる日本仏教音楽協会および日本精神文化協会が主催となり、本願寺が朝日新聞社会事業団と共に後援しています。

しかも、京都仏教聖歌合唱団で中心的な役割を果たしていた宗門校の龍谷大学や京都女専（現・京都女子大学）の学生や、当時既に音楽科を開設していた宗門校の相愛女専（現・相愛大学）の学生たちが、合唱団のメンバーとして当夜の演奏に関わっていました。これは、明治期に生まれた仏教洋楽という新しい仏教文化が、讃仏歌で育った本願寺派宗門関係学校の学生たちとともに、当時の楽壇で話題となるまでに成長したという証なのです。

戦争を挟み、やがて20世紀後半の日本の音楽界では、大規模な仏教関連の芸術音楽作品が発表されるようになりました。この演奏会は、まさにその出発点として高く評価されるべきものでしょう。

当日配付されたパンフレット

連載：仏教洋楽人物プロファイル　第２回

弘田龍太郎 ―― 子どものために

研究助手　山口　篤子

《靴が鳴る》《春よ来い》など、童謡の作曲者として知られる弘田龍太郎（1892-1952）。彼は、仏教洋楽の分野でも、子どもや学生との関わりが深い作曲家でした。

大正14年、弘田は自身にとって最初の仏教洋楽作品を発表し、以降、精力的に数多くの作品を書いていきます。その大きな原動力となったのは、大正15年に創立された「ルンビニー合唱団」でした（この合唱団は、東京帝国大学仏教青年会館に事務所を置き、学生など若い人々が中心となって活動していたようです）。弘田は創立と同時に指揮者に就任し、仏教洋楽の新作発表を目的のひとつに掲げる同団のために、作曲家としても10曲以上の作品を提供しました。残念ながら、この関係は数年で終わりましたが、昭和5年からは、小石川伝通院に設立された「パドマ合唱団」でも同じような活動を行い、代表作《仏陀三部曲》などを作曲しました（詳しくは飛鳥寛栗『それは仏教唱歌から始まった――戦前仏教洋楽事情』［樹心社、1999年］をご参照ください）。

また、昭和10年代には、仏教音楽協会から子どものための仏教聖歌を数曲発表しました。《仏の子供》（詞・甲斐静也）や《西のお国》（詞・武内俊子）などは、童謡の名手らしく、素朴ながら歌詞の語感を活かした作品に仕上がっています。

今後、子どもや学生のための仏教洋楽作品の重要性は、ますます高まると思われます。その中で、弘田龍太郎は、先駆的な存在として評価できるでしょう。

資料提供：
仏教音楽コレクション・A
（飛鳥寛栗氏）

連載：歌ってみませんか　第2回

《 金の扉 》

（詞・武内俊子　曲・小松清）

研究助手　今小路　聡子

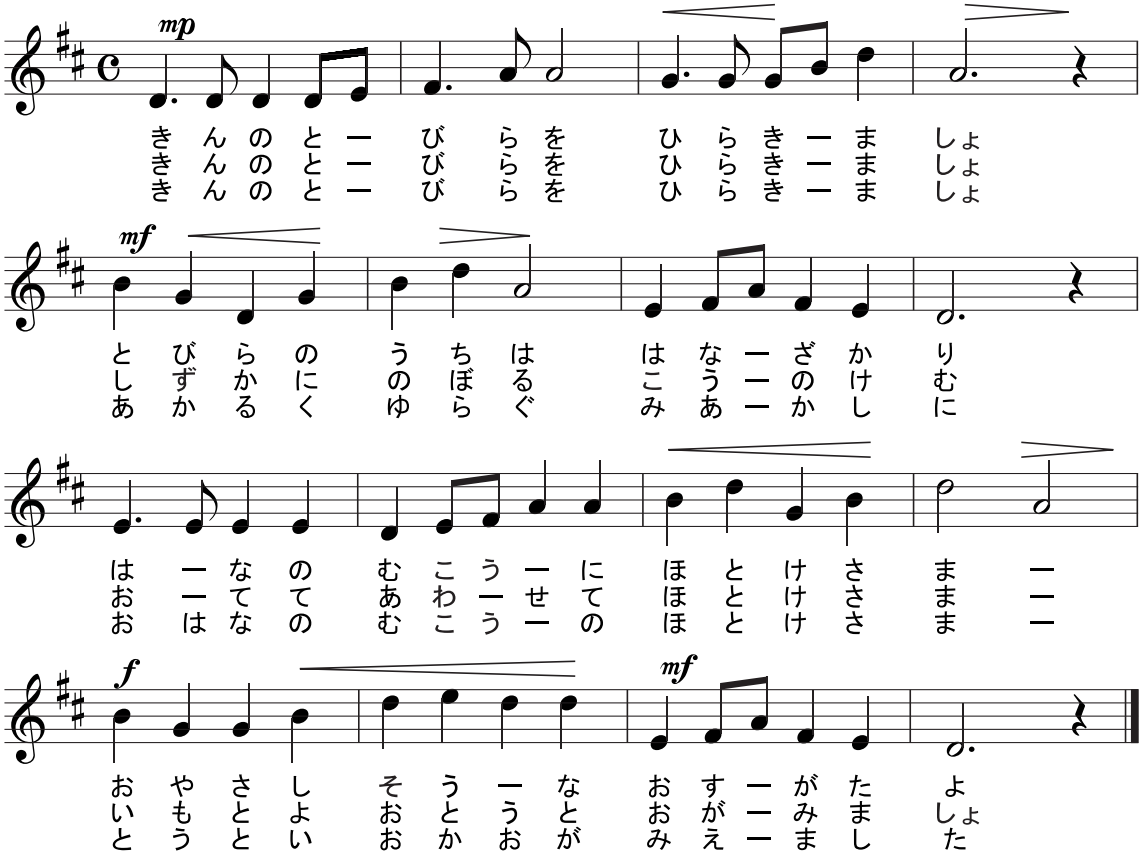
小さな手を合わせて仏さまを拝む、そんな子供のかわいらしい姿が目に浮かぶようなこの曲は、1936（昭和11）年に仏教音楽協会より刊行された第7回『仏教聖歌』にて発表されました。

作詞者の武内俊子（1905−1945）は39年の短い生涯に、4人の子供を育てながら創作活動に励んだ童謡詩人です。有名な作品として《かもめの水兵さん》が挙げられますが、真宗の寺院に生まれた俊子は《西のお国》（曲・弘田龍太郎）や《花まつり》（曲・河村光陽）など子供のための仏教讃歌も残しています。一方、作曲者の小松清（1899−1975）は仏教讃歌の作曲家に名前を連ねる小松耕輔、平五郎の末弟にあたり、《四弘誓願》をはじめ多くの楽曲を残しています。

子供がおまいりする様子を易しい言葉で描いたこの作品は、仏参の開扉にふさわしく、宗門校の京都女子大学附属小学校で長年用いられているそうです。楽譜を一見すると音程の跳躍が多く難しそうですが、音と音をつないで丁寧に歌ってみてください。「お仏壇にお花を供え、お香をたき、お灯明をあげて尊い仏さまのお顔を拝みましょう」、と優しく心地良い曲調で歌えば、煌（きら）びやかなお浄土さながらの、美しくお荘厳されたお仏壇におまいりすることが、子供にとって楽しみとなることでしょう。近頃では核家族化が進み、残念ながらお仏壇のない家庭も少なくありませんが、お盆やお彼岸など、お家でお参りする機会があれば、お子さんやお孫さんと一緒に是非この曲を歌いながら「金の扉」を開いていただきたいものです。

《 金（きん）の扉（とびら） 》

詞：武内　俊子
曲：小松　　清



JASRAC 出0608057-601

一
金の扉を開きましょ
扉の内は　花ざかり
花の向うに　ほとけさま
おやさしさうな　お姿よ

二
金の扉を開きましょ
静かにのぼる　香の煙
お手々合せて　ほとけさま
妹よ弟　をがみましょ

三
金の扉を開きましょ
明るく揺らぐ　みあかしに
お花の向うの　ほとけさま
尊いお顔が　見えました

※仮名の表記は初版の楽譜にならいました。

情報コーナー
みる・きく・よむ

BOOK

『うたのおくりもの 仏教童謡名曲100選』Ⅰ・Ⅱ

飛鳥寛栗 編

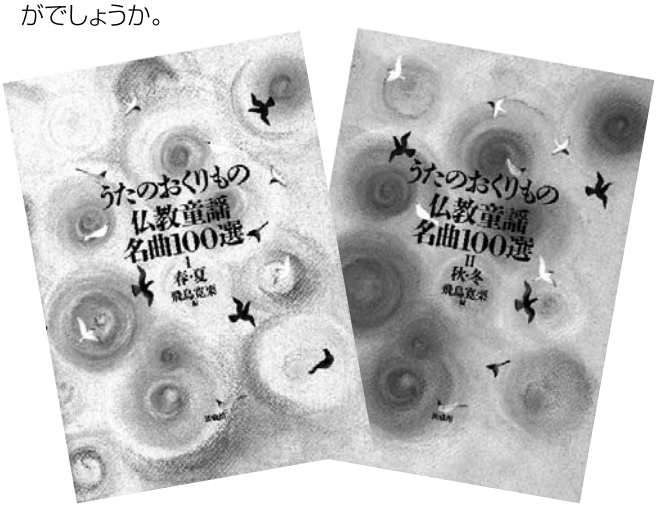
みなさんにとって思い出の童謡には、どんなものがあるでしょう。きっとそれぞれに、なつかしい歌詞やメロディーが思い浮かぶのではないでしょうか。

こういった童謡は大正のはじめ頃より現れましたが、それと時を同じくして、仏教童謡といわれる曲たちも誕生しました。以来100年近く、数多くの作品が世に送り出されましたが、それらをまとめて出版した楽譜集は、今なお多くありません。そこで、「みほとけのおさなごたちに歌ってもらいたい」との思いで編まれた曲集が本書です。

編者の飛鳥寛栗氏（高岡教区若神組善興寺前住職）は「仏教音楽コレクション・A」を主宰されるなど、仏教音楽の資料収集家として活躍されています。また一方で、「まことの保育」の実践者としても、永年にわたって子どもたちにあたたかいまなざしを向けてこられました。

古今の仏教童謡100曲がおさめられていることもさることながら、各巻末には各月にちなんだ心あたたまる随想が添えられており、本書の大きな魅力となっています。子どもたちの暮らしにいつも仏教童謡の歌声を、という飛鳥氏の想いが、仏法のお味わいとあいまって読む人の心に響くことでしょう。

おさめられている数々の歌は、どの曲も親しみやすいもので、子どもはもとより大人にとっても楽しく歌えるものと思います。皆さまもぜひ一度、口ずさんでみられてはいかがでしょうか。



■法蔵館　■各 2,100円（税込み）

■ISBN4-8318-8117-1／ISBN4-8318-8118-X

CD

『國譯阿彌陀經』　永井良樹 制作・訳

■私家版（非売品）

＊浄瑠璃節で語られる「仏説阿弥陀経」のこころ

宮内庁侍医も勤められ、東京大学附属病院内科に勤務されている東洋医学の専門医、永井良樹先生より、素晴らしいCDを頂戴いたしましたので、紹介させていただきます。このCDは、永井先生がご母堂の一周忌に『仏説阿弥陀経』を訳されたものに、先代の故・五世鶴澤燕三さんが作曲・三味線、竹本住大夫さんが語られたという（二人の人間国宝！）、まことに素晴らしい、深みのある作品です。

人形浄瑠璃と「お念仏」、そして浄土真宗の結びつきも非常に密接なものがあります。近松門左衛門作と伝えられる『他力本願記』は、親鸞聖人の伝記を「信空」の一代記としてカモフラージュし、お家騒動をからめた作品だといいます（廣田隼夫氏のホームページより）。籠谷眞智子客員研究員の研究によると、明治19年に、大阪で『親鸞聖人・蓮如上人・顕如上人・弥陀本願三信記』が上演されました。また、龍谷大学学術情報センターには、稀覯本の浄瑠璃台本『しんらんき』が所蔵されており、ウェブ上でもみることができます。

その他の浄瑠璃にも「南無阿弥陀仏」のお念仏が出てくる場面はたくさんあります。竹田出雲作の有名な『菅原伝授手習鑑』第六幕「賀の祝」で、切腹する我が子桜丸を、父（白太夫）は、自ら手を下すことができず「お念仏」をもって介錯をするのです。大夫の絞り出す「お念仏」の曲節に、涙なくして見ることができない名場面です。仏教芸能を渉猟すると、「お念仏」が庶民の生活にしっかりと根を下ろしていた証拠を、随所に発見することができます。伝統芸能、そして人形浄瑠璃の世界を、もう一度見直してみませんか。

＊本作品については当研究所までお問い合わせください。

イヴェント情報

情報をお待ちしています。
次号は12月下旬発行予定です。

●9月3日（日） 13:00～14:00
下京ルネッサンス協賛　聞法会館ロビーコンサート
本願寺聞法会館ロビー　入場無料
※当研究所も協力してコンサート行います
※詳細未定：後日ウェブ・サイトにてご確認ください
→ http://www2.hongwanji.or.jp/ongaku/

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

●7月28日（金） 18:30 開演
第15回 21世紀日本歌曲の潮流
東京オペラシティ　リサイタルホール
※大谷千正客員研究員の作品＝歌集《本願寺抄》が演奏されます　バリトン：大畑理博／ピアノ：柳井和泉
入場料：¥3,500（税込・全自由席）
主　催：国際芸術連盟（電話 03-3356-4033）

●8月5日（土） 13:30／17:30 開演（2回公演）
生命のキャンペーンライブ15th
風をみる人2006アクロス―The Legend of 孫悟空
福岡シンフォニーホール（アクロス福岡）　有料
主　催：筑紫女学園中学・高等学校／RKB毎日放送
（財）アクロス福岡
音楽監督：浅野孝己（ゴダイゴ）
出演：筑紫女学園聖歌隊／中川晃教（俳優）
ソニン（歌手）／高畑淳子（俳優）　他
問合せ：RKB事業部（電話 092-852-6606）

●10月1日（日） 16:00 開演
仏教讃歌混声合唱団「コール・スガンディ」
第3回コンサート
広島市東区民文化センターホール　入場料：800円
問合せ：長門（gizyo@ccv.ne.jp）
→ http://www.urban.ne.jp/home/gizyo/

●10月13日（金） 10:00～15:00
岐阜教区仏教讃歌交流会
※岐阜教区内合唱団＋萌木の響き（東海教区）
岐阜別院本堂　入場無料
問合せ：コール・デ・ナーモ
（電話 0585-32-2250：光専寺・楠洋子）
岐阜別院（電話 058-262-0231）

●10月22日（日） 14:00 開演
藤の実コーラス10周年記念演奏会　要整理券
京都コンサートホール　アンサンブルホール・ムラタ
問合せ：佐々木町子（電話 075-343-1414）

●11月11日（土） 18:00 開演　**（予定）**
築地本願寺楽友会　報恩講コンサート
築地本願寺「本堂」　（主催　築地本願寺楽友会）
指　揮：酒井良一
オルガン：池濱朱美　　ハープ：高久美穂
内　容：・音楽法要「重誓偈作法」
・仏教讃歌《咲き匂う》《生きる》他
・記念法話　※講師未定
問合せ：築地本願寺楽友会事務局
（電話 03-3541-1131）
※内容は現時点での予定です

●12月11日（月）
第十回　菩提樹チャリティー公演
愛知県芸術劇場コンサートホール
問合せ：仏教文化振興協会
（電話 052-303-8316）

●毎月最終金曜日　12：20～12：50
築地本願寺 パイプオルガン ランチタイムコンサート
「2000の風」
築地本願寺「本堂」　入場無料
※12月は第4金曜日

研究所だより

■演奏団体登録のお願い

本願寺仏教音楽・儀礼研究所に演奏団体として、約280の方々に登録していただいております。宗門の合唱運動を概観すると、まだまだ登録していただいていない団体も多数あるようです。ご一報いただければ、簡単な用紙を送付いたしますので、是非ご登録ください。登録団体には、様々な情報をお届けいたします。

また、登録データが古く、休眠状態の団も見受けられることから、順次再調査とアンケートをお願いするべく準備をすすめております。その節はご協力くださいますよう、よろしくお願いいたします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

御堂演奏会だより

昨年のアンケートに基づき、御堂演奏会2006の曲目が決定となりました。楽譜（CD付）は、例年通り8月1日販売開始予定です。

《いのち（編曲:藤林由里）》《そんな時私は口ずさむ（編曲:森琢磨）》が新編曲です。《いのち》は、少し高度な編曲になっていますが、うっとりする程素晴らしい仕上がりです。ご期待いただき、チャレンジしてみてください。

また、昨年は兵庫教区からのご依頼で合同練習会を開催しました。その他の地域での練習会にも対応したいと考えています。ご要望をお寄せください。

【演奏曲目】　（　）内の数字は過去の演奏年度
1．**しんらんさま**（00/01）
2．**あの空見れば**（99/00）
3．**芬陀利華**（05）
4．**いのち**（93/96）＊新編曲
5．**そんな時私はくちずさむ**（89/90/91/92）＊新編曲
6．**念　仏**（04/05）

【指揮者】　今年は経験豊富な合唱指揮専門家を予定しています
11月22日（水）**田末　勝志**（相愛大学講師・テノール）
23日（祝）**鈴木捺香子**
（関西合唱連盟理事他、受賞歴・審査員経験多数）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

■本願寺仏教音楽・儀礼研究所　研究スタッフ

平成18年4月1日現在の研究スタッフは以下の通りです。仏教音楽の他、「現代に即応した儀礼・法要」の研究を行っています。「儀礼」に関する研究成果も順次発表する予定です。ご期待ください。

所　長	小野　功龍
常任研究員	轡田　智文・佐々木正典 福本　康之・前田　正樹
研究員	波々伯部宏彦
研究助手	今小路聡子・多村　至恩 馬淵紀久子・山口　篤子
研究生	澁谷　暢達・三浦　明利
客員研究員	大谷　千正・籠谷眞智子・前田　美子
委託研究員	尾家　京子・小野　　真・櫛本　真隆 鹿多　証道・杉浦　隆彰・近松　照俊 杜多　隆信・宏林　晃信・丸山　千晶 村上　義恭

（各五十音順）

連載　本願寺　折々の文化　第３回

― 本願寺の能•狂言によせて ―

籠谷（かごたに）　眞智子（まちこ）
京都女子大学名誉教授
本願寺仏教音楽･儀礼研究所　客員研究員

今日（こんにち）のように、能と狂言を組み合せて番組をつくることは、すでに十五世紀の室町時代からおこなわれていました。

とりわけ本願寺の場合、蓮如上人が、能や狂言を真宗教化の導入として上演されたため、本願寺の門徒をはじめ一般市民のあいだにも、本願寺の能・狂言がとても親しまれるようになっていきました。

たとえば、文明十三年（一四八一）本願寺では、蓮如上人の父上・存如上人の二十五回忌の行事として、四日間にわたり、能・狂言が上演されています。

そのときの狂言には『鳥さし』が上演されました。『鳥さし』とは、竿の先の針で鳥を射しとる鳥商人のことです。

鳥さしが木枝の鳥を真剣（しんけん）にねらっているときのことでした。上半身裸（はだか）の男がやって来て、鳥さしの着ている上衣をほしいと乞いました。

鳥さしは鳥をさすことに一心でしたので、男が要求した衣装をはじめ、腰の刀や脇指まですべて男に与えてしまい、いつのまにか素裸（すっぱだか）になってしまいました。

さあ、たいへん！裸の自分に気づいた鳥さしは「やるまいぞ。やるまいぞ。」と、衣装をもち逃げした男を追いかけるのですが、ついに追いつけなかったというのです。

この狂言に大笑いしていた観衆は、「ヤンヤ、ヤンヤ」と囃（はや）しました。大変な爆笑となりましたが、その笑いがしずまりますと、蓮如上人は、静かにお立ちになり、おもむろにお話をされるのです。

「世間仮（か）りのことにも念力をいれねばなりません。」と注意され、仏法も油断なく聴聞することをやさしく説かれたということです。

聴聞衆の笑いの中にも、つねに聞法の心を忘れてはならない、という蓮如上人のみ教えを、大切にまもってまいりたいものです。

■編集後記

ニューズレターの第3号をおとどけいたします。

仏教音楽･儀礼研究所では、宗祖聖人の大遠忌法要関係のさまざまな企画の検討や準備が進んでいます。それと同時に、現在、秋の御堂演奏会に向けて、要項の作製、楽譜の作成やCDの録音などの準備を進めています。

さて、本年5月の宗祖降誕会での音楽法要に龍谷総合学園の生徒の皆さんが讃歌衆に加わり、若々しく瑞々しい歌声を響かせてくれました。すばらしい法要になってきたなあとの実感です。今号に広島音楽学校の小川先生が、学校での音楽法要について記してくださっていますが、全国でたくさんの学生さんたちが同じ楽曲を覚え歌うことのすばらしさに喜びを感じるとともに、親鸞聖人大遠忌法要で、満堂の学生さんたちが大合唱するさまを、勝手に想像してちょっと感動してしまいました。

法味雑誌『大乗』の「この人に聞く…ひとすじの道」のコーナーで、飛鳥寛栗先生が編集者からの仏教音楽とは?という質問に「…仏･法･僧を敬う心が生まれ、聞法の心が深まる音楽が音楽法要。つまり、歌うことによって教えが聞こえてきて、そして喜びを歌わずにいられないものです。…」とお答えになっています。

単なる音楽でない「仏教音楽」ということをあらためて考えさせられる言葉でした。この仏教音楽を、もっともっとたくさんの皆さんに歌っていただくことができるよう、積極的な歩みを進めたいと思います。

（事務局）

■Webサイト・リニューアル

勤式･仏教音楽研究所のWebサイトが、4月より「本願寺仏教音楽･儀礼研究所Webサイト」としてリニューアルされました。新しいサイトでは、本紙と連携しながら、さまざまな情報を発信していく予定です。どうぞご期待ください。

■バックナンバー、及び本号の追加配付、新規購読希望は下記までお申し付けください。

■掲載記事･情報募集中!

教区･お寺での仏教音楽活動、様々な合唱団活動、学校･幼稚園･保育園での音楽活動、法要･イベント･記念式典など、皆さまからの情報をお待ちしています。

『佛教音楽　ニューズレター』　第三号（2巻1号）

編　　集　本願寺仏教音楽・儀礼研究所
http://www2.hongwanji.or.jp/ongaku/

発　　行　浄土真宗本願寺派　教学伝道研究センター
所　長　上山　大峻
〒600-8349
京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町92番地
本願寺第3庁舎内
TEL. 075 (371) 9244　FAX. 075 (371) 5761

発 行 日　2006（平成18）年6月30日
頒　　価　無料